A scenic view of a lake with weeping willow trees in the foreground and a forest in the background. The water is calm, reflecting the sky and the surrounding greenery. The willow branches are lush and green, hanging down from the top of the frame. In the distance, a line of trees marks the far shore of the lake.

漢詩を味わう

第60回

柳花詞 二首其一

劉禹錫 りゅう う しやく

開従緑条上

開くこと緑条の上よりし

散逐香風遠

散じて香風の遠きを逐う

故取花落時

故ゆかりに花落つるの時を取り

悠揚占春晚

悠揚として春晚を占む

柳絮は緑の枝から白く柔らかい綿を開き
花の香りを追うように風に乗って飛んでゆく
百花の散る時をことさらに選び
ゆつたりと晩春の主役を演じている

《柳花》 柳の種子についた白毛。柳絮、柳のわた。

《緑条》 緑を付けた枝。ここでは柳の枝。

《故》 ことさらに。わざわざ。

《悠揚》 ゆつたりとしてあがるさま。

中唐の詩人、劉禹錫は年一つ違いの柳宗元とともに二十一歳で進士に及第しました。柳宗元と王叔文一派に属し少壮官僚として活躍しましたが、王叔文の失脚とともに地方に左遷され、劉禹錫はその後たびたび中央と地方の間の往復を余儀なくされました。

風に舞う白い柳の綿、柳絮をうたった二首連作の詩の一つです。五言絶句の形をとっていますが、曲に合わせて歌う歌詞のスタイルで、柳絮の飛ぶさまをやさしい言葉でリズムカルに表現しています。柳絮は柳花とも呼ばれ、晩春を彩る風物詩のひとつとして良く詩にうたわれています。「折楊柳」という古楽府があり、中国では送別の際に柳の枝を折って旅の平安を祈る習慣があったといわれています。柳は音が留と通じ、またその枝を輪にするとほじけてすぐもとに戻るのので、別れてもすぐ会えるという気持ちを託すとも言われます。転動を繰り返す劉禹錫にとつては、柳は身近な存在だったのかもしれない。「花発くとき風雨多し」と于武陵の詩にあるように、春風は花びらを落とす無情の風ですが、わがもの顔にふわふわと飛ぶ柳絮にとつては味方です。落ちてきたかと思うと、またフワッと舞い上がる軽快な柳絮。そして過ぎゆく春。儘ならぬ人の世を重ね合わせて、読む人をやるせない感傷に引き込みます。

劉禹錫には土地の風俗や人情を民謡風にうたう詩が多く、晩年に親交があった白楽天は彼の詩を称賛して「彼の詩の在る所には、神仏の護持が有る」と言ったと伝えられます。ちなみに今月の条幅の参考は、この第二首を書きました。

軽く飛んで風を仮らず 軽く落ちて地に委せず 繚乱として晴空に舞い 人をして無限の思いを発せしむ



《大意》柳絮は、風の力を借りずとも軽く飛び、落ちてきても地べたには着かぬ。入り乱れて晴れた空を舞い、人びとを物思いに沈ませる。

(劉禹錫・柳花詞其二)

花落曉風靜かに 鳥啼き春日遅し



《大意》花は散って夜明けの風は静まり、鳥は啼いて春の日は暮れるのが遅い。(王都中)

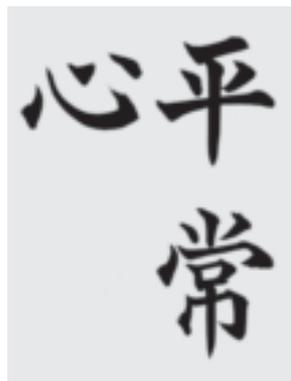
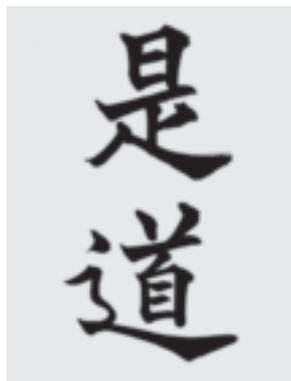
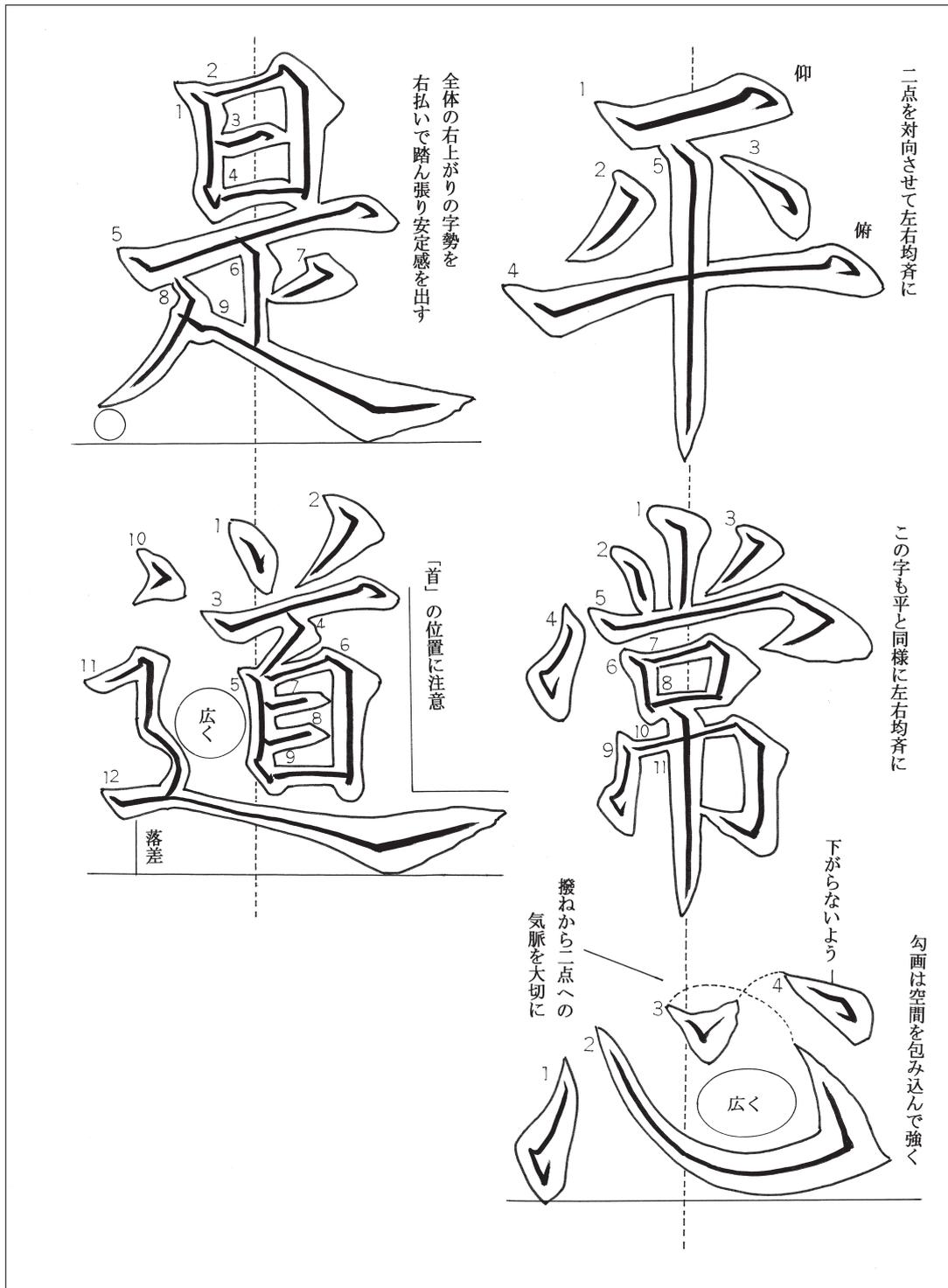


読み

平常心は是れ道ひまじょうしん
(日常あるがままの心が仏道そのものである「無門関」)

平 常 心
是 道

佐藤象雲書



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

是道 平常心

是道 平常心

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

水善利 萬物

是道 平常心

水は善く万物を利す

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	順 位	氏 名
文月(ふみづき)葉月(はづき)長月(ながつき) 神無月(かなづき)霜月(しもつき)師走(しす)		

和泉 溪石 先生書

孤 陋 寘 聞 愚 蒙 等 誚
 孤 陋 寘 聞 愚 蒙 等 誚
 孤 陋 寘 聞 愚 蒙 等 誚

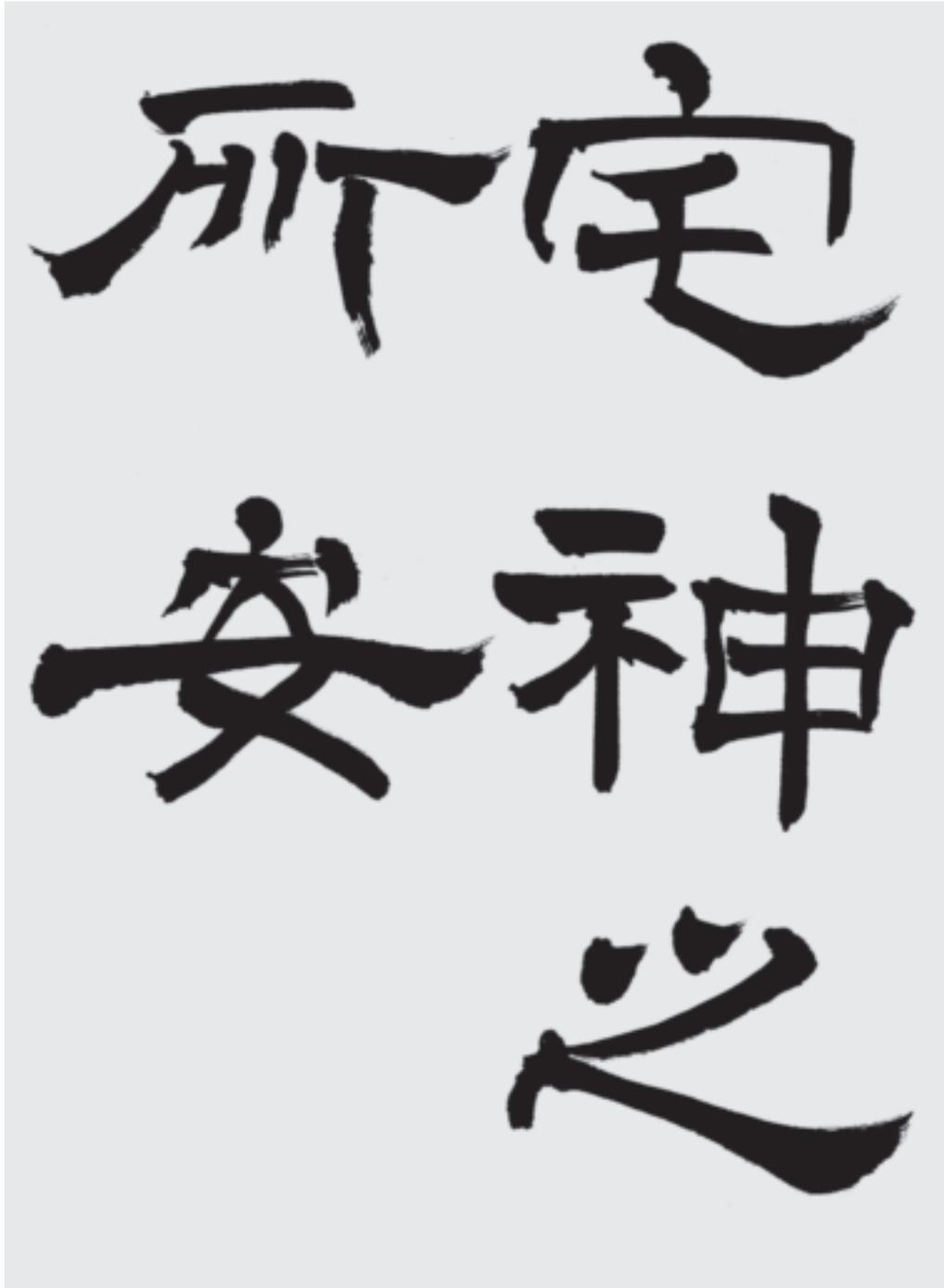
佐藤 象雲 書

音

コロウカブン
グモウトウシヨウ

略解

独学で友なければ自ら聞くことが少なく
愚者と同じく人のそしりを免れない。



(舊)宅は、神の安んずる所なり

■ 史晨後碑^{ししんこうひ}

(後漢・西暦一六九年)の臨書 (5)

象雲臨

『宅神之所安』

史晨碑は筆画の軽重の変化が素晴らしく、左右に張った字勢が安定感をもたらしています。またゆったりとして重厚感もあるため、臨書に際しては、もの静かでしとやかな印象の表出を心がけてください。

「宅」ウ冠の左右の縦画を長めにして下部を覆う。波磔の方向に注意する。

「神」申の日は大きめに書いてやや背勢に。

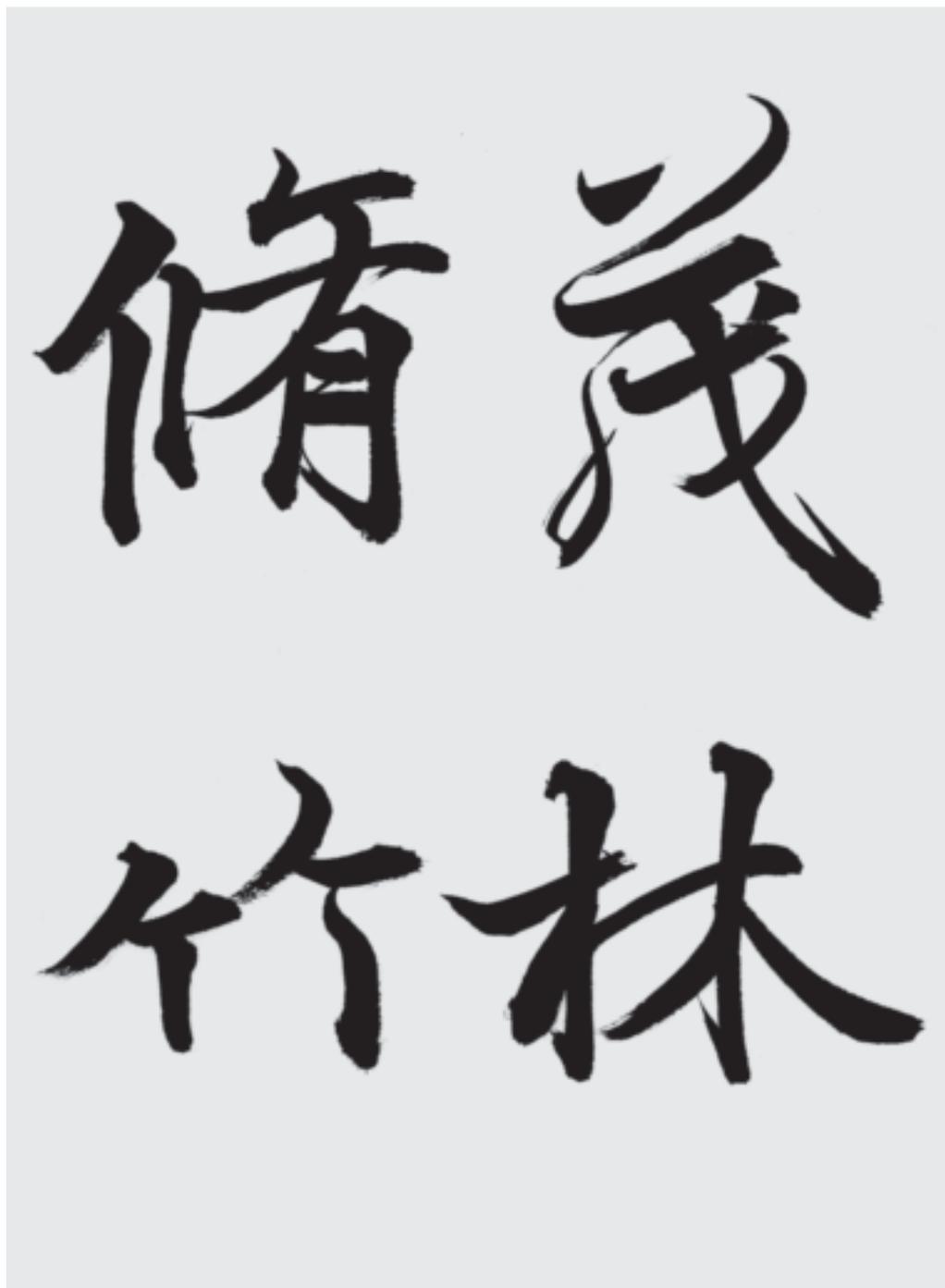
「之」安定させるためには第三画と第四画のバランスが大切。

「所」左右の払いで力の均衡を図る。各線の方向を捉えたい。

「安」シンメトリーな結体。ウ冠は思い切った幅を狭く。

茂林脩竹

茂林脩竹



象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書（7）

『茂林脩竹』

蘭亭偽作説

一九七七年、郭沫若は「蘭亭論辯」を出版し、蘭亭が偽書であるという説を発表し、蘭亭序の真偽が日本の書道界でも話題になりました。これは、蘭亭序は太宗とともに陪葬され、真跡が遺されていないことが根本にあります。その蘭亭偽作説の論拠は、五つほどあります。そのなかでは、王氏一族の墓誌とこの蘭亭序の書体の大きな違いや、王羲之の史伝に見える屈強な性格と蘭亭序の書風が合わないことなどが挙げられ、王羲之七世の孫である智永の筆としています。

現在では、蘭亭偽作説を支持する研究者は少数派ですが、唐時代の太宗が所持していた真筆をもとに臨書されたものであるにも関わらず、それぞれ大分書風が異なること。また太宗時代、既に双鉤填墨の技術が完成していたにも関わらず、真跡の双鉤填墨といわれるものの存在が確認されていないことなどもあり、まだ完全に偽作説を否定できるまでに至っていない原因のようです。

ちなみに本欄で習っている「神龍半印本」の制作者、馮承素は双鉤填墨の名人と言われています。